人口現象からみた
阪神・中京両地域周辺の
都市化の限界

岸　本　　実

もくじ

1. はしがき
2. 阪神・中京両地域の人口の増加
3. 阪神地域周辺の都市化
4. 中京地域周辺の都市化
5. 都市化地域の性格
6. むすび

1. はしがき

筆者はさきに,『人口現象からみた京浜葉地域の都市化の限界』と題して.京浜葉周辺地域について,その都市化の前線の推移を論じた。[1] そのさい,1920年以来1960年までの40年間の国勢調査の資料をもちい,その間における人口の増加形態・人口密度の推移・人口増加率の推移をみて,それ等を通じて,京浜葉周辺地域で,都市化の前線がどのように推移したかをみた。そして,現段階において,都市化の前線を判定するめやすとして,市区町村ごとに,人口密度1000人/km^2,5年間の人口増加率10%,都市人口率(第2・3次産業の比率)80%の線が適当であることを論じた。

そこで,このたびは,阪神・中京両地域について,まったく同様の方法で,

都市化の前線の推移をみることとした。資料は1920年の第1回国勢調査以来，1960年まで5年ごとの統計をもちい，市区町村別に，5年ごとの人口増加形態，人口密度，人口増加率，都市人口率を計算し，これを図化した。ここで，人口増加形態というのは，市区町村別に1920年の人口数を100として，その後5年ごとの指数をもとめ，それぞれの曲線を同様にして計算した日本全体の曲線と比較して，第二次大戦前に全国平均以上に増加したものをⅠ，全国平均なみの増加をしたものをⅡ，全国平均以下の増加をみたものをⅢとした。そしてⅠ～Ⅲそれぞれについて，第二次大戦後に，全国平均以上に急増したものをa，全国平均なみの増加をつづけたものをb，全国平均以下の増加のものをcとし，こうして9つのタイプに分類した。そのさい，とくにⅡ$_a$およびⅢ$_a$の分布に着目した。すなわち，Ⅱ$_a$は第二次大戦までは全国平均なみの増加であったが，戦後人口の急増した地域で，Ⅲ$_a$は戦前は全国平均以下の増加であり，いわば農村的性格をもっていたものが，戦後人口の急増したもので，いずれも大都市周辺に分布し，都市化のはげしい町村と考えられる。そこで，これ等の分布と，都市化の前線をしめす各等値線との関連をみることとした。

いうまでもなく，各市区町村の計算にあたっては，京浜葉の場合と同様，その行政区画は1960年の行政区画を中心とし，それ以前のものは同年の行政区画にくみかえて，その計算をおこない，得られた数値を，それぞれの各市区町村役所の位置に記入して，おのおのの等値線をひいた。

これまで，日本の大都市についての都市化の研究は多いが[2]，京浜・阪神・中京などについては，それぞれことなった立場，ことなった方法での研究が多く，同じ立場からこれ等3大都市の都市化の研究をまとめたものは，皆無といってよく，大都市地域の研究としては，当然にこれがのぞまれるところである。本研究は人口現象のみからみた研究ではあるが，まったく同じ方法で3地域を比較考察せんとしたものである。3地域とも，その自然地理的，歴史地理的条件に応じ，それぞれ個性のある固有の拡大をしたとも考えられるが，同じ日本国

内の同じ社会経済的条件のもとでの拡大であり，共通した性格がもとめらるべきであろう。

もともと都市域の拡大や都市化の前線をみる立場にはいろいろの立場のあることは前著のなかで述べたし，一般にも理解されていることであるが，人口現象もその有力な手がかりの1つと考えてよい。都市の人口の膨張拡大は都市そのものの自然増加によってのみおこるのではなく，むしろ，自然増加率についてみると，都市地域は農村地域よりも低率である。都市の人口が急速に増加するのは，転入人口，すなわち，社会増加によることは当然であり，なおこのことについては別に論ずる。人口のはげしい転入地域としての大都市が，その人口の増加にともなって，その周辺の都市化がどうおこなわれたかをみることは，将来の都市の計画やその対策に稗益することが大きい。

2. 阪神・中京両地域の人口の増加

ここで阪神地域というのは，図2にしめされた人口密度1000人/km^2 (1960) 以上の連続した地域をさし，大阪・神戸両市を中心とした27市9か町の地域をふくむ。京都市およびその周辺はふくまれていない。それは，1000人/km^2 の線が京都市周辺と大阪市周辺とではそれぞれ独立し，府境付近で切れており，その中間に非都市化地域をふくむと考えられるからである。また，中京地域というのは，図6のごとく，上と同様にしてもとめたもので，名古屋市周辺から岐阜市周辺にわたる10市20か町村をさしている。

阪神・中京両地域についてこの範囲をえらんだ理由は，阪神・中京両地域ともに，1960年当時，この範囲が都市化の前線をしめす線，すなわち人口密度1000人/km$_2$の線のなかにあるからである。

阪神周辺地域では，1920年当時は，大阪・神戸両市の中間地域にあたる西宮—尼崎の工業地化は未だそれほどに進展せず，大阪・神戸両市周辺は都市化の上からは，それぞれ独立しており，その後，周辺の人口の増加にともなって現

在の状態となったものである。ことに第二次大戦前後から工業地化・住宅地化の進展で，人口の増加をみた。中京地区についても同様なことがいえる。

阪神・中京両地域への人口の集中がいつころからはじまったかについては明確ではないが，筆者が明治後期（明治18～明治43年）について，５年ごとに年代をくぎり，府県別人口数と府県別自然増加率から，各府県の流入人口を推計してみると，東京府への流入の顕著にあらわれたのがすでにその初期の明治23～28年のころであり，そして，大阪・兵庫両府県へのそれは第３期の明治28～33年の時期とみられ，愛知県へのそれは明治38年以降となっている。これ等の細部については別稿にゆずり，人口の大都市への集中が，すでに明治後期にあることは確実である。

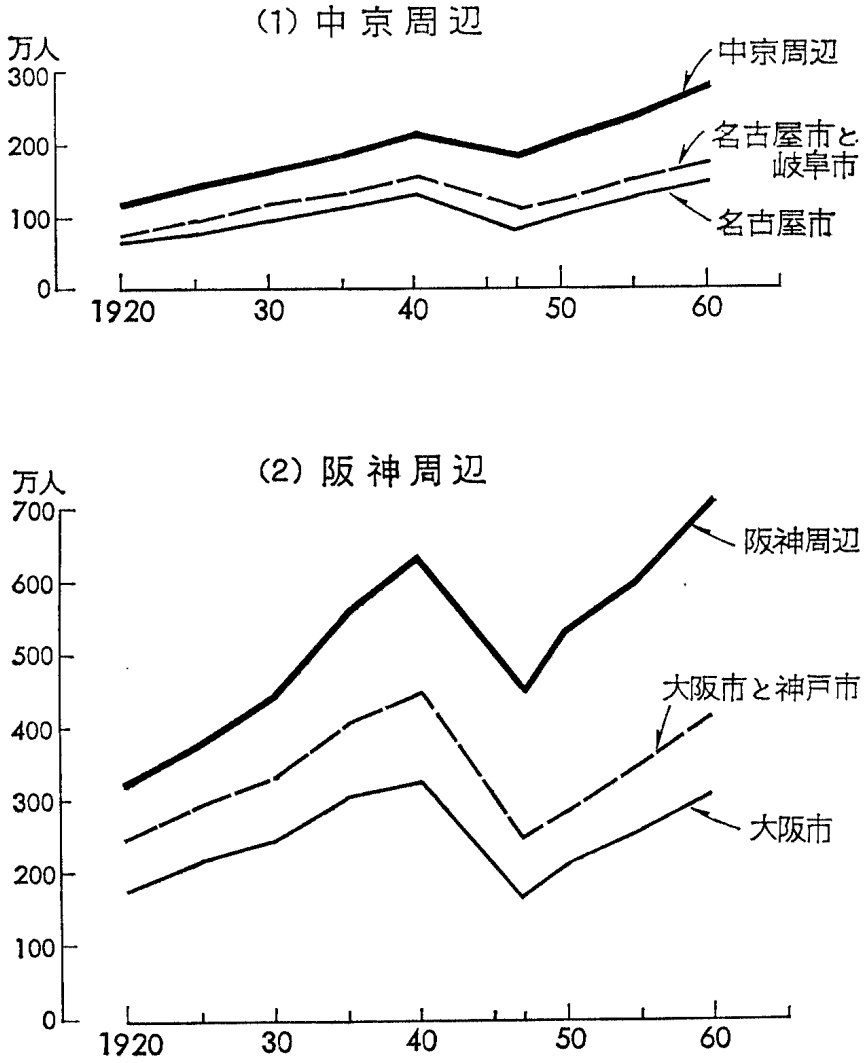

図１　阪神・中京両地域周辺の人口の増加(1920～1960)

1920年(大正９)以降の阪神・中京両地域の人口の増加は図１のごとくである。これによると，阪神地域27市９か町の人口は，第二次世界大戦の影響で急減した時期はあるが，その前後では，年々増加をつづけ，1920

年当時約328.1万人であったものが，1960年には約705.8万人となり，その間に約2倍強になっている。これは京浜葉周辺で同様に計算した値である，1920年の469.8万人から1960年の1,384.6万人への増加に比較し，阪神地域はその数の上でも，増加速度の上でも京浜葉地域にはおよばないが，かなり著しい増加といえる。ことに図1をみて気のつくことは，1930年をすぎてから大阪・神戸両市域以外の地域の人口の急増である。この時期は経済恐慌のあとをうけ，『市域における都市機能の集積は飽和に達して，その機能のうち住宅・工場・学校施設などはいちだんと外縁への移動をあらわした』[(4)]時期にあたり，豊中，池田，芦屋のような衛星住宅都市の誕生，吹田，高槻，泉大津などの工場を中心とした都市の発展した時期に相当している。

こうした現象は戦災のために一時中止されたが，戦後ふたたび郊外地化の現象のはげしくなったことが図のなかにも見えている。

中京地域については，阪神地域ほど明瞭にはあらわれていないが，戦後その傾向のあることが図にみえる。

こうした大都市周辺の人口増加が，都市化の前線の推進をもたらしているものといえる。

3. 阪神地域周辺の都市化

（1） 人口密度の推移

1920～1960年の間の10年ごとの人口密度1000人/km^{2}の等密度線は図2のごとくである。

図によると，1920年のころの1000人/km^{2}の線は，大阪市周辺と神戸周辺はそれぞれ独立し，大阪市周辺では，大阪市とその東部の布施市をふくみ，大阪湾ぞいに南へ堺を経て泉大津市にまで達しており，兵庫県尼崎市もその圏内にある。布施は堺とならぶ工業都市であり，すでに明治の中ごろ城東工業地区の延長として近代的に工業化され，ことに1914年（大3）の大軌線（現近鉄奈良線）

と1924年(大13)の参宮線（現近鉄大阪線）の開通で工業地化・住宅地化のすすんだものであり，大阪市東部の早い都市化地域のなかにはいり，堺も1870年(明治3年）薩摩藩の紡績所の開設以来，在来の綿工業の近代化をみ，早くから紡績業を中心に織物工業，染色工業の中心として発展し，日露戦争前後から機械器具工業(車両，シャベル，スコップ）を加え，1920年当時すでに工業都市としての発展がみられている。堺以南の高石（大阪南郊の臨海住宅地)，泉大津（明治にな

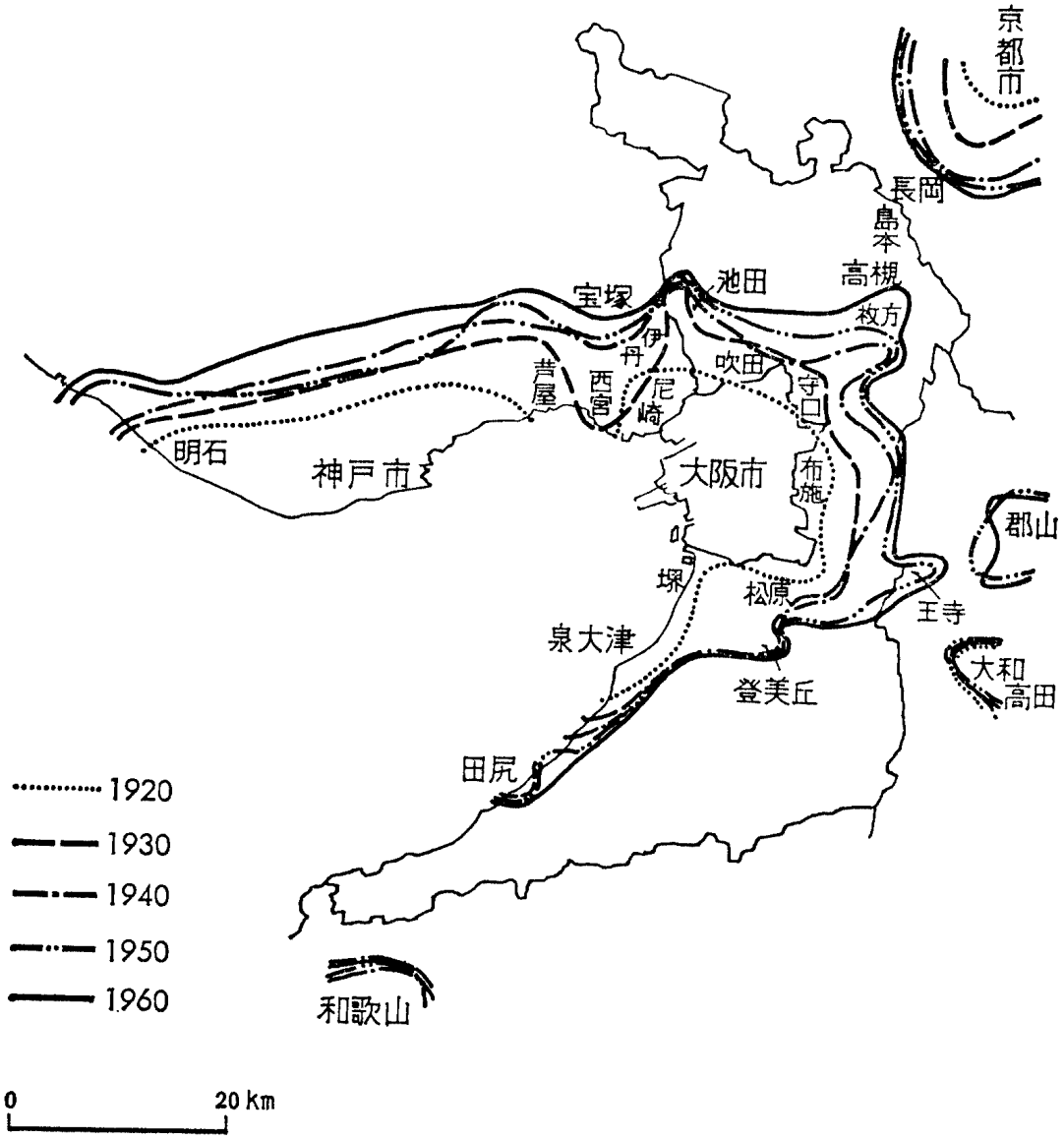

図２　阪神周辺の人口密度の推移
1920～1960；1000人/km²

って真田ひも工業，ついで毛毛布，綿毛布工業)，忠岡(紡績工業)，岸和田(江戸期和泉もめんの集散，1894＝明治27年岸和田紡績会社設立，以来紡績・織布工業)，貝塚(和泉もめんから明治になって紡績業発達。日紡貝塚工場は1934＝昭和9年設立)，泉佐野(もと和泉もめん，1887＝明治20年タオル製造開始)などそのほとんどが，江戸時代以来の和泉綿の栽培に関連し，明治になって近代化された繊維工業中心の諸都市として発達しており，1920年当時，都市化がかなり進んでいたものである。

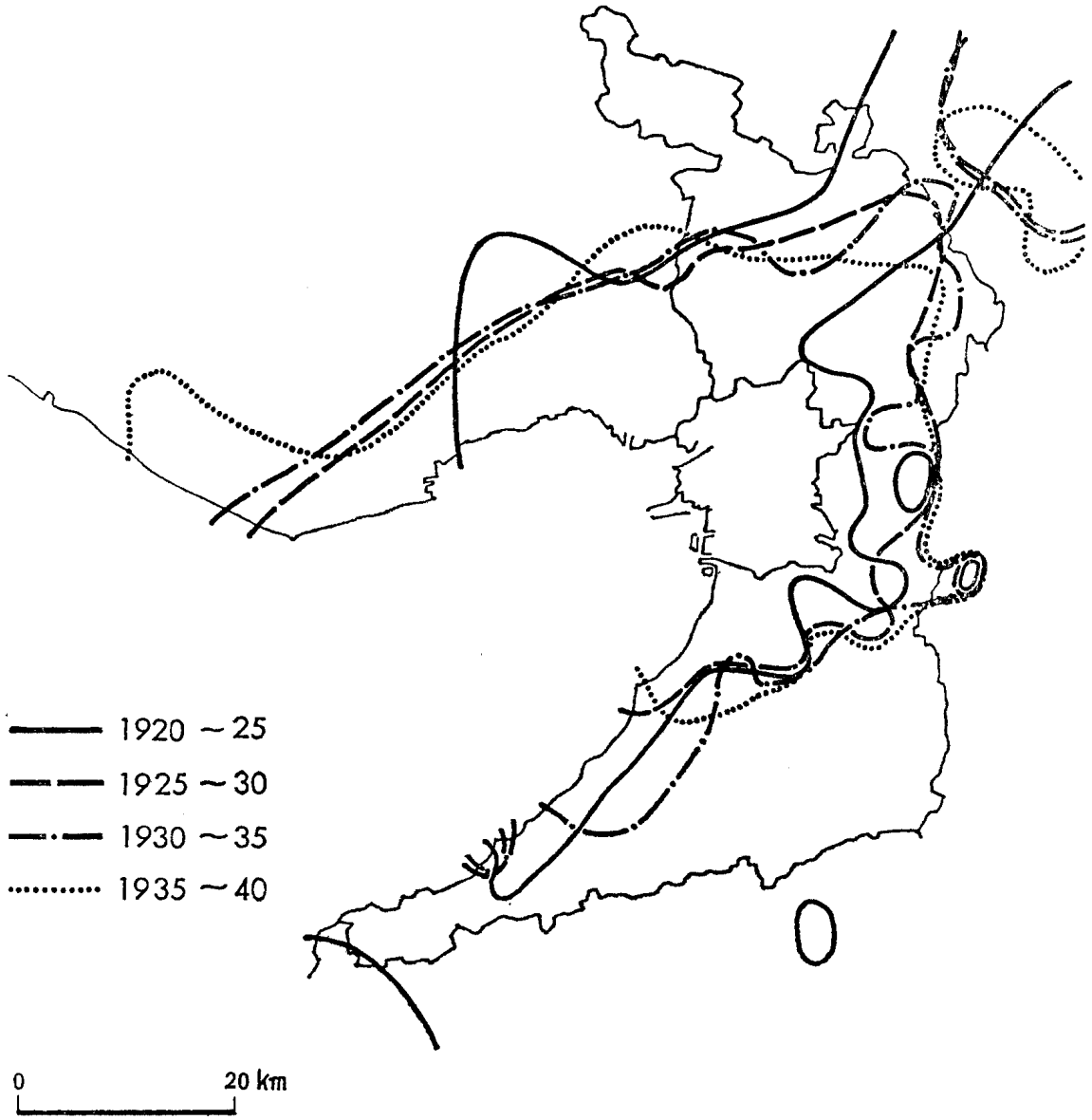

図3-(1)　阪神周辺の人口増加率の推移
1920～40；5年ごと(10%)

大阪西郊の尼崎も，すでに明治中期以降，食品，紡績，金属，ガラスその他の近代工業が導入せられており，大正～昭和初期の軍需工業勃興期を前にしてかなりの工業的発展をみせていた。しかし，その西の西宮の発展は他に比較して未だし状態で，圏外にあり，高級住宅地としての芦屋も同様に圏外になっている。伊丹・池田・豊中・吹田・守口の諸地域も1000人/km² の線の外にあり，つぎの1930年になってようやくその圏内に加えられた。1930年をすぎ，いわゆ

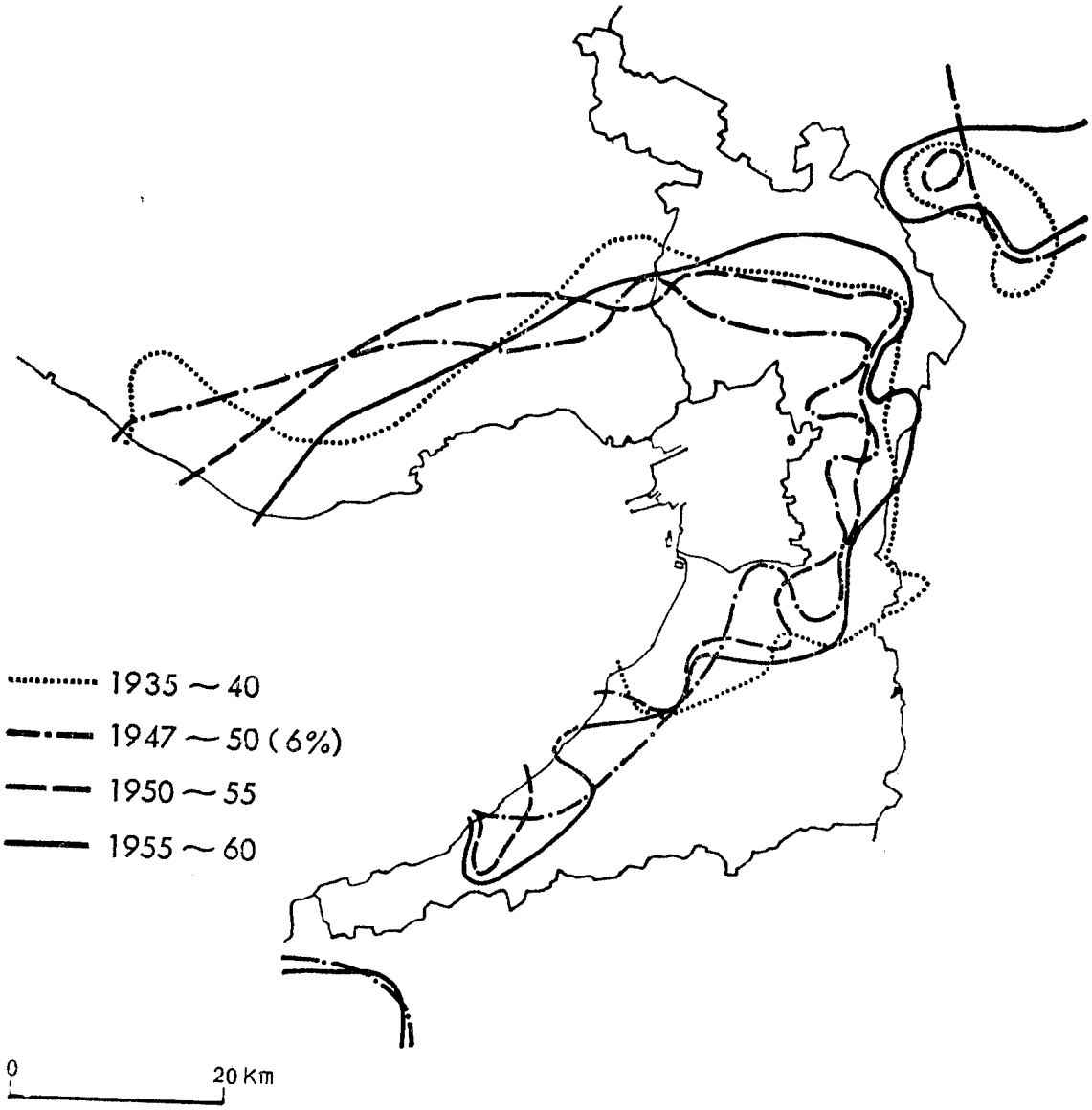

図3-(2)　阪神周辺の人口増加率の推移
1947～60；5年ごと（10%）

る軍需産業の発達の時代をむかえ，1940年になると，西宮，伊丹が圏内にはいり，大阪市の北西，北東，東への膨脹が顕著で，北は老ノ坂山地南麓の線，東は生駒山地西麓の線に達し，大阪と神戸が連続して都市化現象が著しく，池田のほか豊中（1915＝大正4年，住宅地開発はじまる）寝屋川，枚岡をふくみ，戦後の1950年には，北西は枚方から東は生駒山脈の狭隘部をこえ，奈良県の王寺をもこの圏内にふくむにいたった。このことは人口増加率の推移をしめす図（図3）のなかにもみえている。しかし，人口密度でも，人口増加率の上でも，京都市とのあいだには府境付近できれ目がみられ，非都市化地域が介在し，都市化地域が連続していないことは注目してよい。

(2) 人口の増加形態

前記の方法で各市町村ごとに人口の増加形態を計算して図示したのが図4である。

大阪，神戸をはじめ戦前からすでに工業化された周辺諸都市は I_a に属し，戦前すでに全国平均以上の増加をしめしており，戦後もひきつづき全国平均以上の増加の状態にある地域である。

問題は II_a と III_a の分布で，II_a は戦前は全国平均なみの増加で，II_a はいわば戦前における都市化はみられなかったが，戦後人口の急増をみたもので，羽曳野市，東鳥取町がこれに属している。奈良県の大和郡山市もこれに属する。また III_a は戦前は農村的な性格をもっていたが，戦後住宅化，工業地化がさかんとなった地域をしめし，大阪市東北郊の三島町（東海道本線と淀川との間の低湿地域にあたる農村であった）・大東市・美原市・田尻町・岬町がこれにあたっている。いずれも都市地域の周辺に分布している。京都市の西南郊の長岡町も III_a で，大阪府島本町（I_b）・京都府大山崎町（I_b）はともに阪神の都市地域と京都周辺の都市地域の中間にあり，ここで両地域は分離された形となっている。大東市の北，寝屋川市の東にある大阪府下の四条畷（II_b）・交野（II_b）・田原（III_b）各町は II_b〜

II_c の形に属し，大阪市周辺としては，いまだ都市化の充分におよんでいない地域と考えられ，同じ大阪府の東南の富田林（II_b）・河内長野（II_b）の両市や太子（III_c）・河南（III_c）・千早赤坂（III_c）各町も II_b～III_c の形で，まだ農村的な色彩の濃い地域である。

阪神地域の東と南をかこむ奈良県内から和歌山県にかけての市町村のほとんどは III_c の形で，まだ都市化の現象はみられず，農村的色彩が濃厚である。

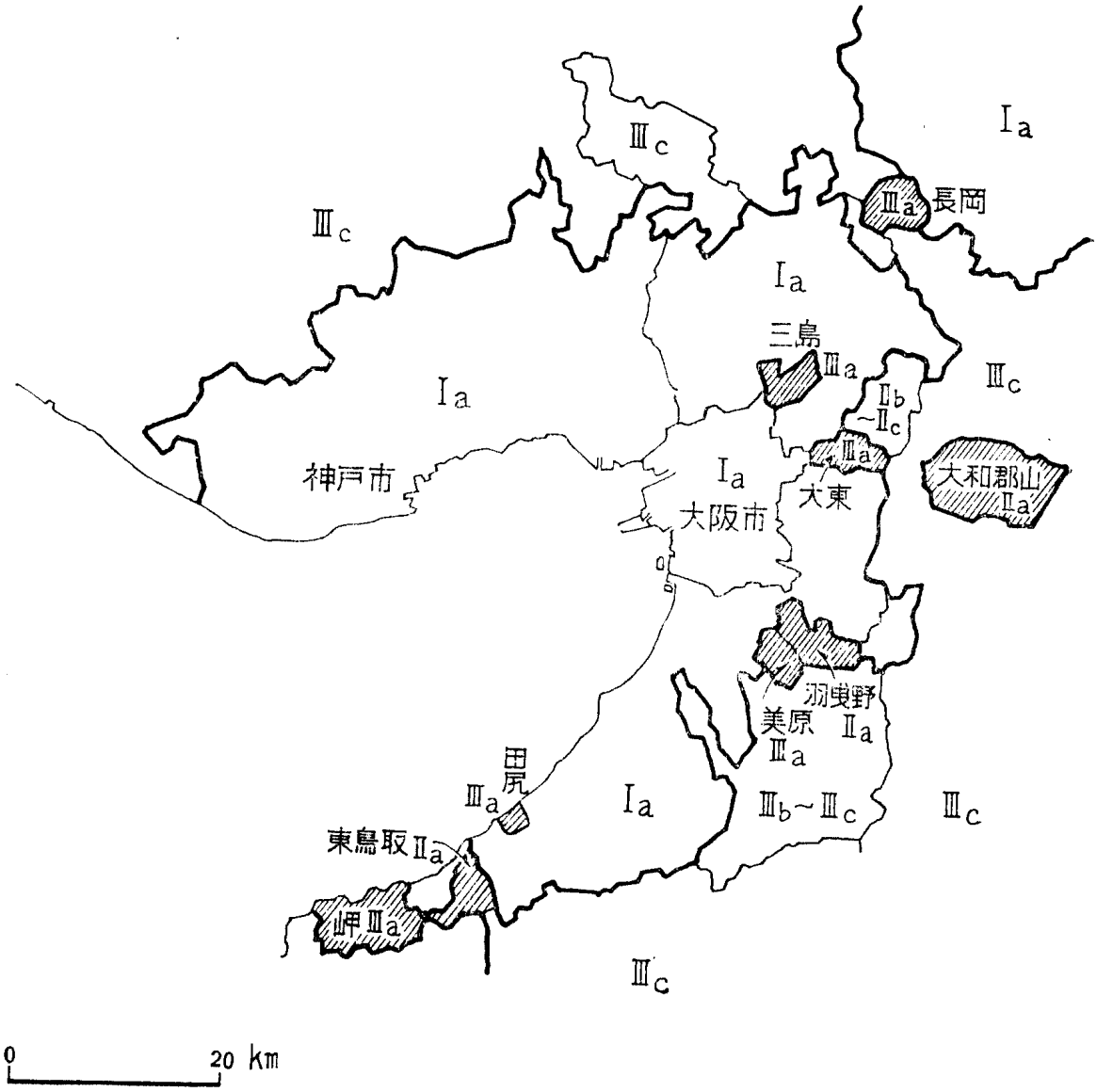

図４　阪神周辺の人口の増加形態
1920～1960；1920年を100とし５年ごと

（3） 都市化の前線

以上の人口密度1000人/km²，5年間の人口増加率10％に都市人口率80％の各等値線を重ねあわせ，それに，人口増加形態Ⅱ$_a$およびⅢ$_a$の分布を重ねたのが図5である。

これによると，上記3種の等値線はかなりの程度に一致し，Ⅱ$_a$とⅢ$_a$はほぼ

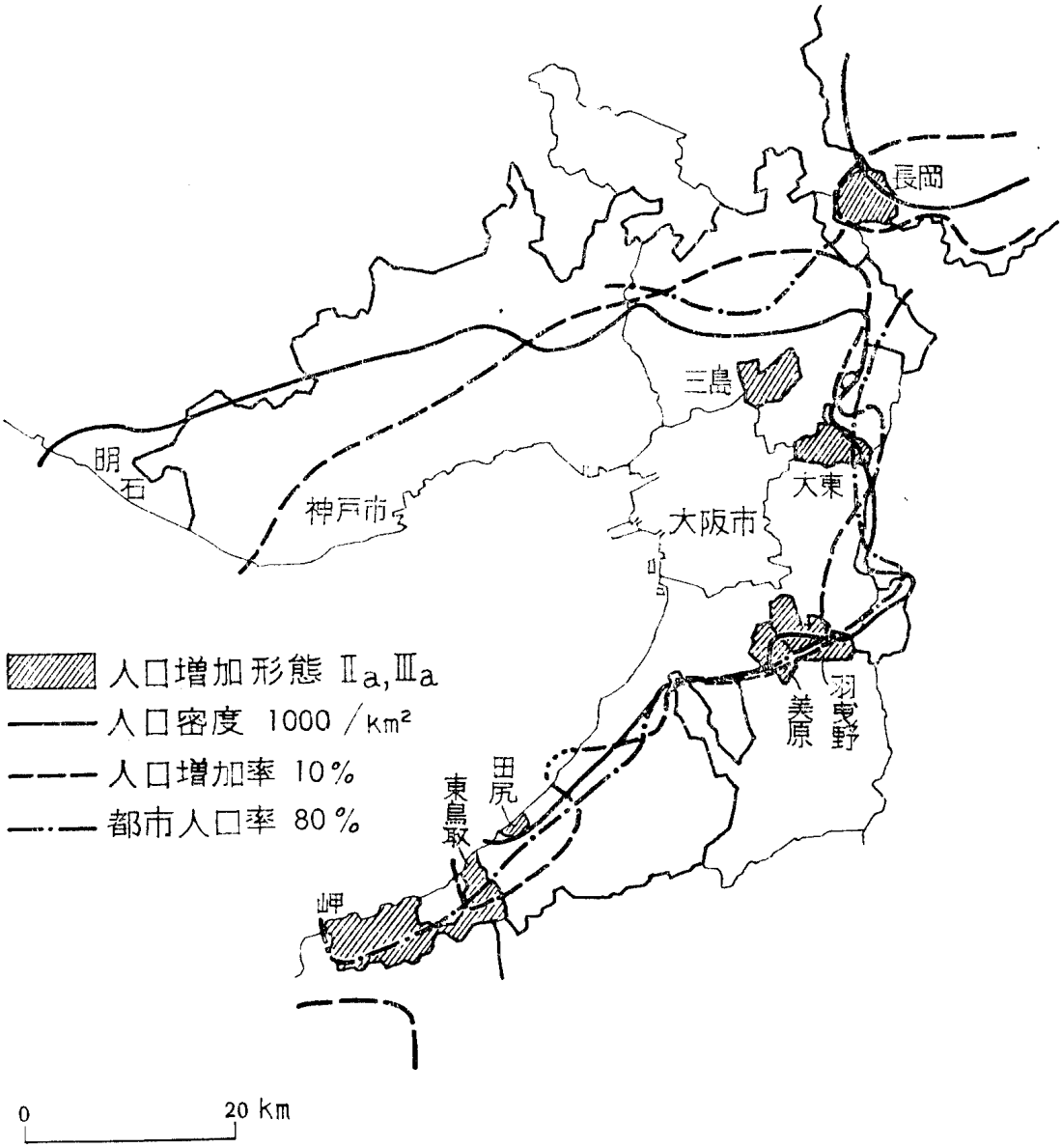

図5　阪神周辺の都市化の前線
1960

その線上に近く分布する形がみえる。これは京浜葉周辺においてみた場合と全く同様の現象で，要は上記の3等値線が都市化の前線をしめす指標として意味のあることをしめすものといえる。そこで，阪神地域の都市化の前線としては西は明石市から神戸市の市街地周辺をふくみ，宝塚・伊丹をつつみ，池田・箕面・茨木・高槻と，ほぼ老ノ坂山脈の南麓にそいに東にで，ここで枚方市から寝屋川市をつつみ，生駒山脈の西麓を南に下る。ここから八尾・柏原両市を経て，生駒山脈の東で，関西本線にそう奈良県王寺町に突出部があり，これから西へ，大阪南郊の松原市を経て，あとは大阪湾岸の諸都市を泉佐野市にまでのびている。泉佐野市以南の南海鉄道にそう臨海地域はⅡ$_a$ないしはⅢ$_a$に属し，戦後都市化の進展しつつある地域と考えられる。

4. 中京地域周辺の都市化

(1) 人口密度の推移

1920年以後1960年までの40年間における各市町村別人口密度1000人/km^{2}の等値線の分布は図6にしめしたとおりである。1960年になってこの等密度線は名古屋—津島——一宮—岐阜—大垣の諸都市をそのなかに包含し，連続した地域と考えられる状態になったが，それ以前ではこれ等の諸都市はそれぞれ独立したものであり，等密度線の推移が，都市化の発展をものがたっている。

もともと，名古屋市を核心とした中京圏については[5]，その『都市化は青年期段階』の特色をもち，『過大都市的症状』はいまだみられず，それだけに地域計画にあたって広域的開発が計画的に進められている地域であることが指摘せられている。将来その成果が漸次あらわれてくることが予想せられるが，これまでの都市化の地域的発展のあとを図6によってみたい。

1920年の等値線をみると，名古屋市のほか，津島，一宮周辺にそれぞれ独立した圏があり，1930年にはそれぞれの地域を拡大し，その上，一宮圏が尾西をふくみ，さらに岐阜市がそれに加わっている。当時，各地域の核心となってい

る都市は繊維工業を中心とした人口の増加とみられる。一宮を中心とした尾西地方で，古く三河綿を基礎とした綿織物がさかんであり，一宮自身明治に入り輸出向け白もめんとかすり生産の中心をなし，尾西市も「結城じま」(絹綿交織)の生産で名をあげ，佐織が1897年(明治30)綿織物の「佐織じま」と「白もめん」の生産で名をあげていた。それが1905年(明38)，綿織りの競合地であった浜松の遠州織が，力織機の導入で広幅ものの生産と輸出で急速に伸びた影響をうけ，尾西地方一帯の織物は大きな打撃をうけた。たまたま1901(明34)に津島市での毛織りの開始の刺戟をうけ，以後毛織物への転換をおこない，いわゆる尾西地方の毛織物工業地域の形成をみるにいたった。こうして，明治末期から大正期にかけ毛織物工業都市の発展と，それにともな

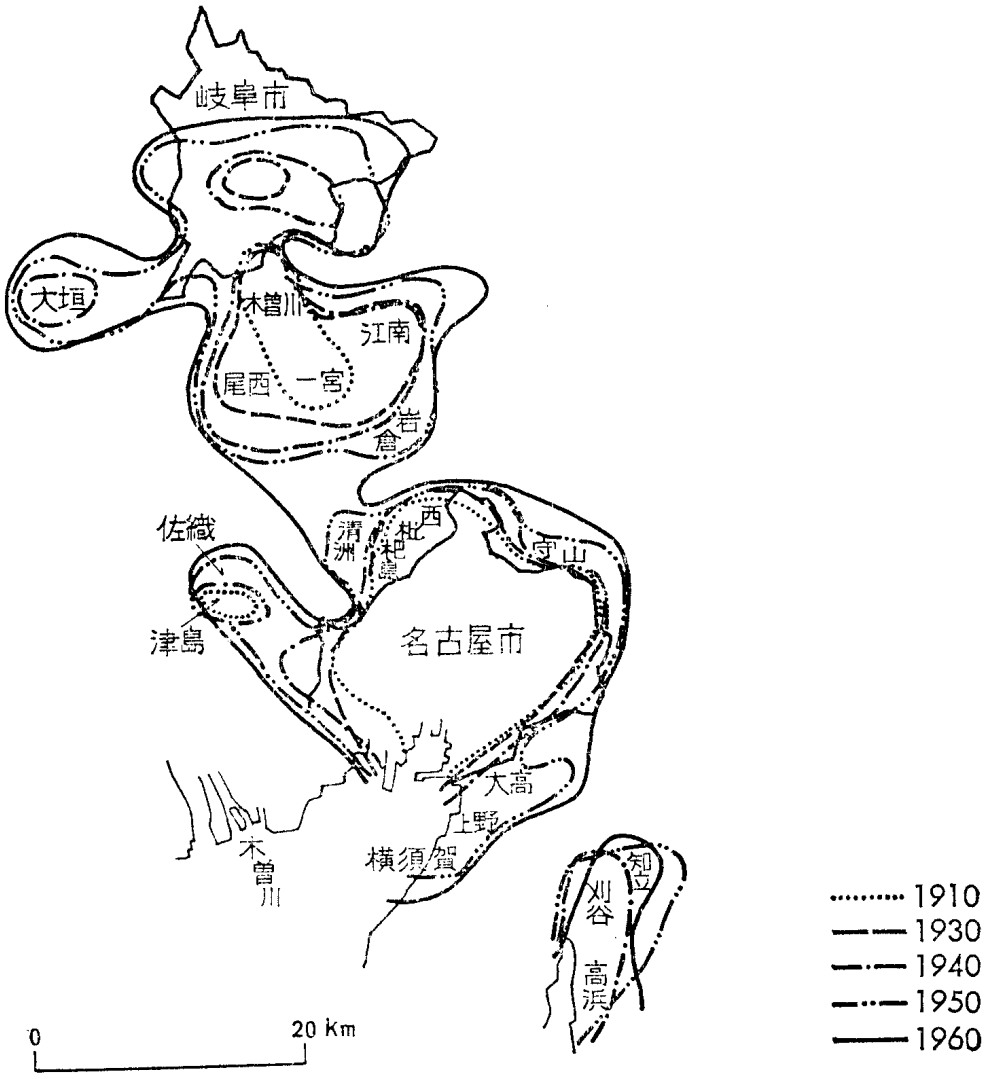

図6　中京周辺の人口密度の推移
1000人/km²

う人口の増加をみ，これが，一宮市のほか尾西・津島などの都市的発展の基礎となった。第二次大戦後，名古屋市のほか，各都市の人口の膨脹にともない，周辺地域の住宅地化，工業地化によって，1960年の等密度線の分布をみたものと解せられる。

ここで，中京地域の都市化の方向が，全体として同心円状ではなく，東海道本線にそい東南から西北方向に細長く伸びていることが，その特異性の1つとして目につく。これは木曽川左岸の低湿地をさけたものと考えられる。

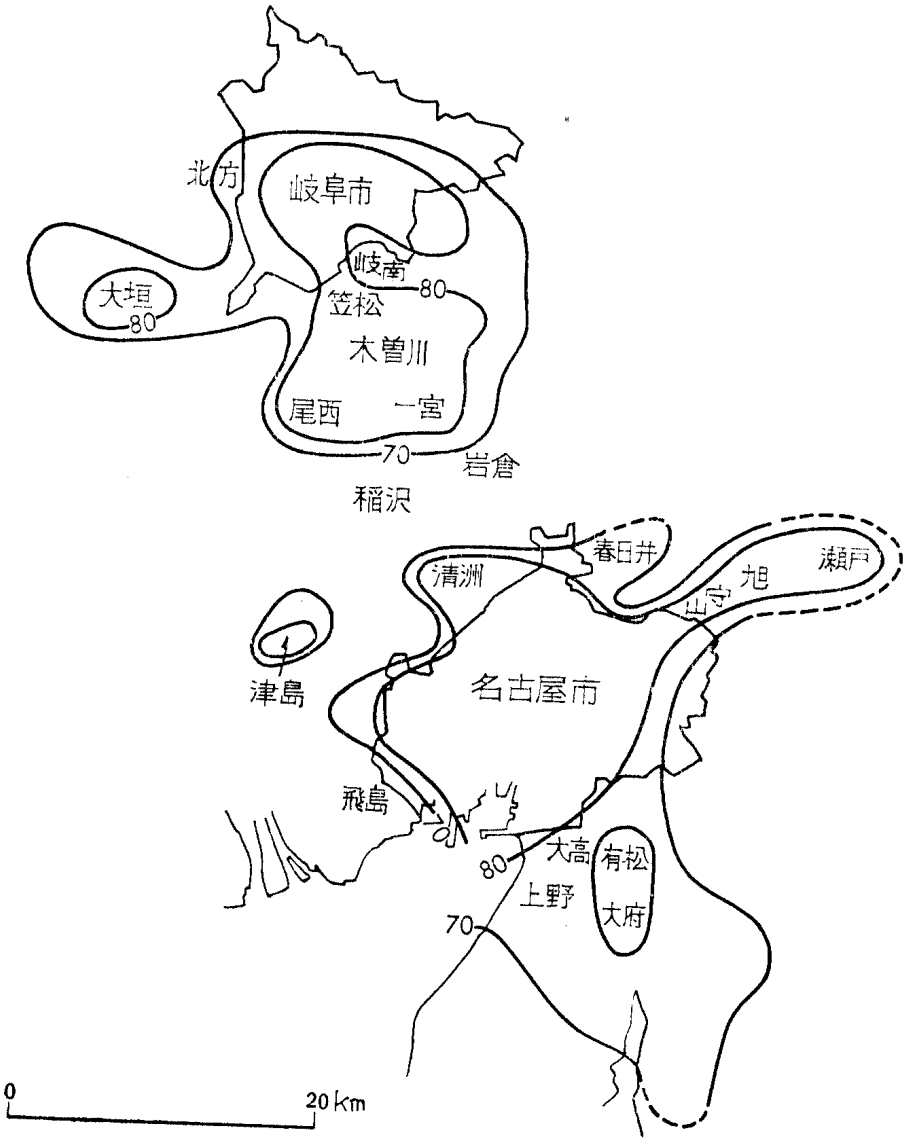

図7　中京周辺の都市人口率
(1960)

しかし，図7の都市人口率（第2・3次産業率）の分布によれば，一宮・名古屋の中間地域にあたる稲沢—岩倉間の地域では，農業人口率のかなり高い地域のあることも注目してよく，逆に，名古屋市東北の守山—旭—瀬戸方向と，同市東南の有松—大府方向に高い都市人口率の分布をみている。

（2） 人口増加形態の分布

人口増加形態の上からⅠ$_a$，すなわち戦前から人口の増加が全国の平均以上で，戦後もなお急増をつづけている地域は連続することはなく，名古屋市およびその周辺，一宮・尾西地域，岐阜市とその東南にかぎられ，それぞれ独立して存在することにまず目をひく。これは，京浜葉地域や阪神地域のごとく，広く連続したⅠ$_a$地域のみられるのとはことなった様相の１つである。

戦後とくに人口の急増をみたⅡ$_a$とⅢ$_a$の分布は，名古屋市の東南では，東郷—豊明の地域，同市東北では，師勝と春日井にみられ，名古屋市の伸張方向をものがたっている。市の西部の十四村，飛島村など，木曽川下流の低湿地はⅢ$_c$の形で，戦前も農村的性格をたもち，戦後も未だに人口の増加をみない農村地域と考えられる。津島市は

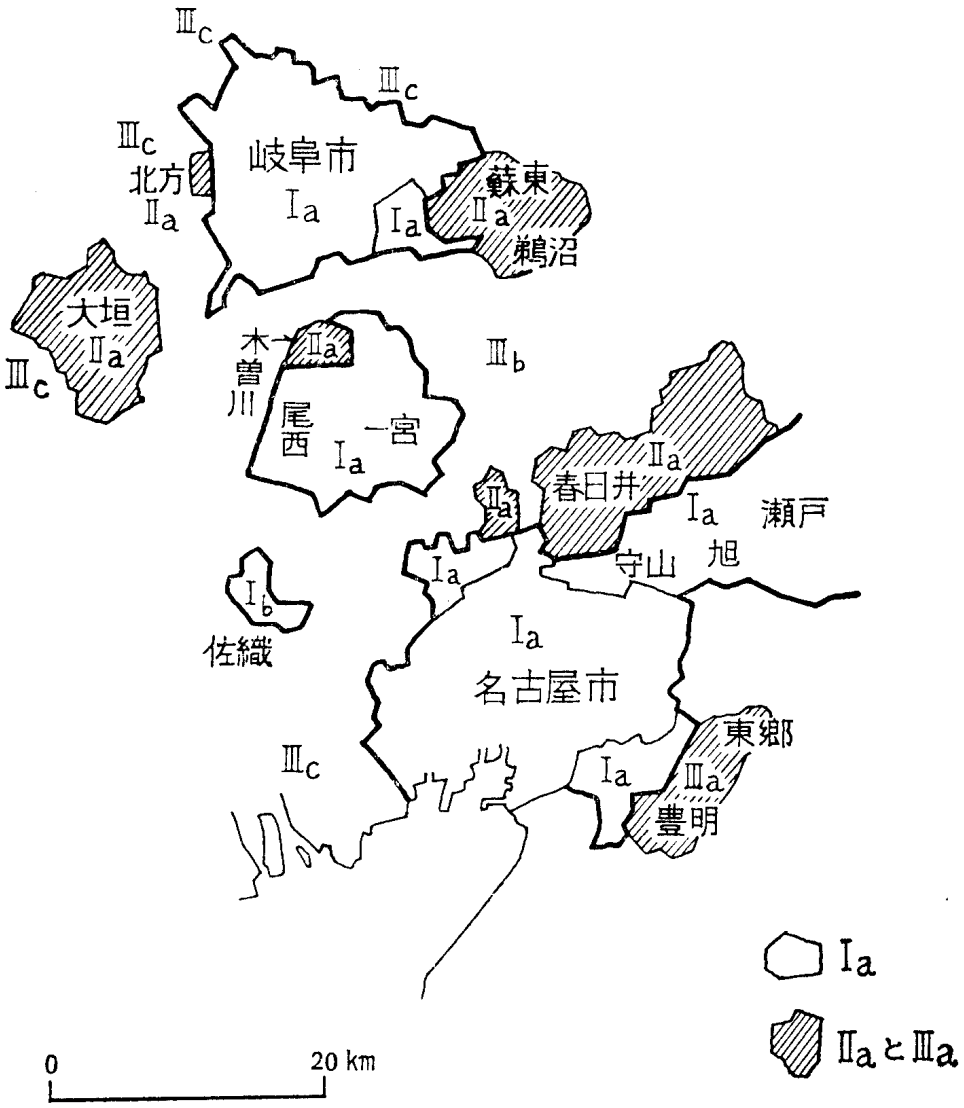

図８　中京地域周辺の人口増加形態
(1960)

Ⅲ$_c$，その北方の佐織もⅠ$_b$で，戦後における人口の増加はそれほどに大きなものではない。一宮市の西北の木曽川・岐阜市周辺の各地域にⅡ$_a$が分布し，同方向への発展をものがたるが，市の西は揖斐川流域の低湿地であり，北方は山地をひかえ，いずれもⅢ$_c$の形に属している。

（3） 都市化の前線

以上の1960年の人口密度1000人/km^{2}の等値線，1955～1960年の5カ年間の人口増加率10％の線，都市人口率80％の線を重ねあわせ，人口増加形態Ⅱ$_a$およびⅢ$_a$の分布を同時にしめすと，図9のごとくになる。ここで，3つの等値線は，ややはなれるとはいえ，かなりの一致がみられ，その線上または外側にⅡ$_a$およびⅢ$_a$が分布し，都市化の前線と，戦後における中京地域の都市化の方向をしめしている。

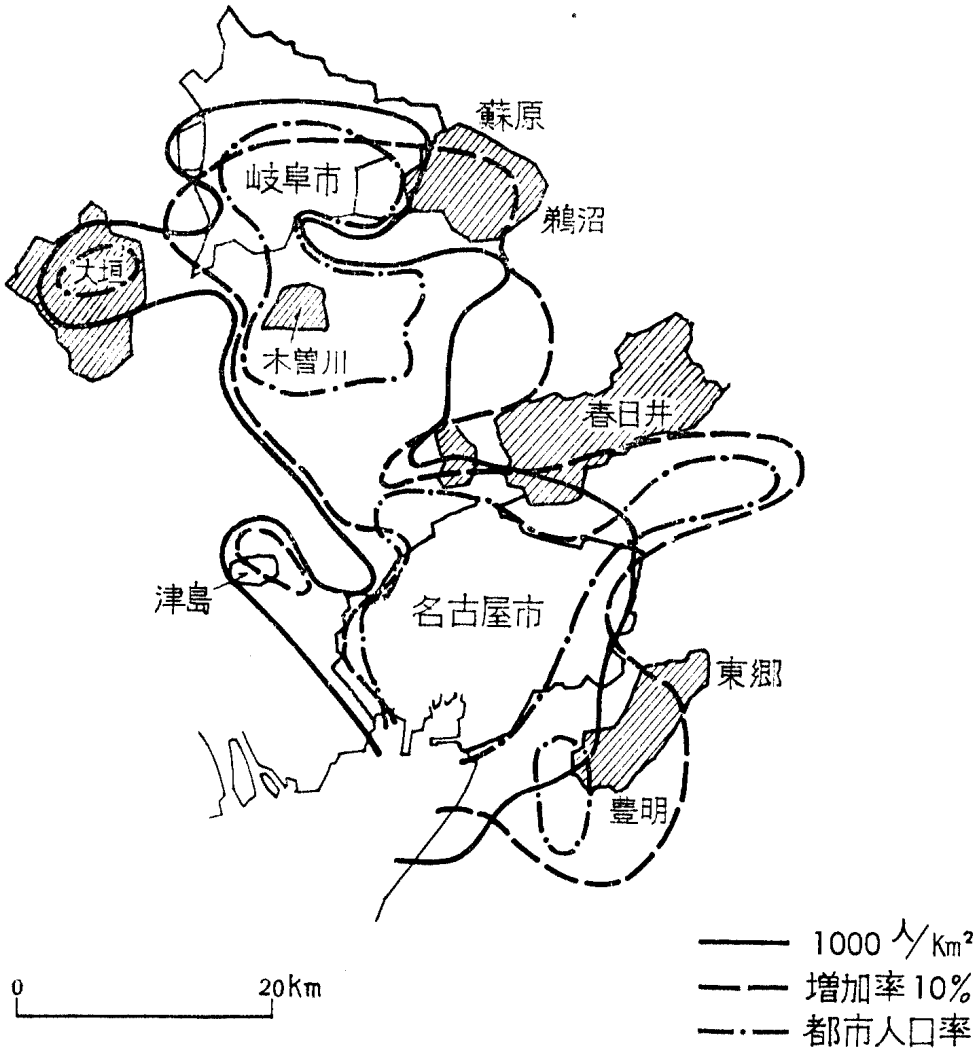

図9　中京周辺の都市化の前線
(1960)

5.　都市化地域の性格

1920年から1960年までに都市化地域のなかにくみ入れられた地域について，その性格を検討したのが，図10と表1である。

ここで都市化地域にくみ入れられた地域というのは市町村別にみてその人口密度が1000人/km²となったものをさし，1920年以降年ごとに新しく1000人/km² 以上となった市町村の数と，その面積の合計をあたのげが表1で，これを図に示したのが図10である。

図10によると，3地域とも市町の面積の上からみた

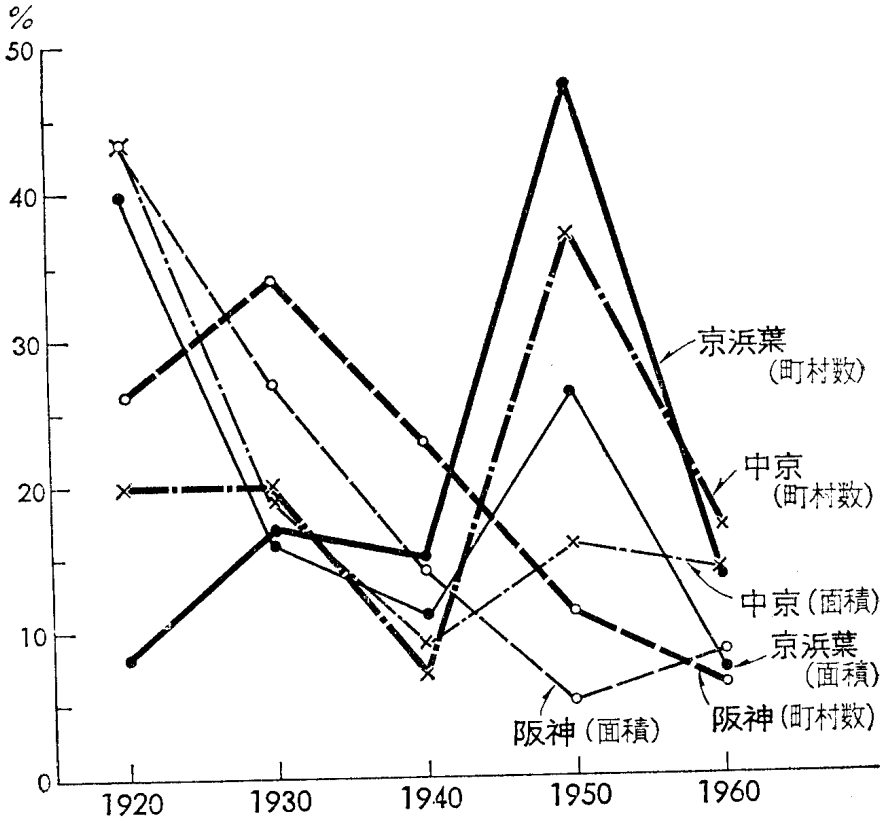

図10　人口密度1000/mk²以上の市町村の増加数

表1　人口密度1000人/km² 以上の市町村の増加数

		1920	1930	1940	1950	1960	計
京浜葉	市町村数	5	10	9	28	8	60
		(8)	(17)	(15)	(47)	(13)	(100)
	面積	1,081km²	442	285	716	209	2,733
		(40)	(16)	(11)	(26)	(7)	(100)
阪神	市町村数	9	12	8	4	2	35
		(26)	(34)	(23)	(11)	(6)	(100)
	面積	602km²	380	239	75	114	1,410
		(43)	(27)	(17)	(5)	(8)	(100)
中京	市町村数	6	6	2	11	5	30
		(20)	(20)	(7)	(37)	(16)	(100)
	面積	355km²	155	75	131	110	826
		(43)	(19)	(9)	(16)	(13)	(100)

推移と，市町村数の上からみた推移とはほぼ平行している。ただ，1920年には，3地域とも，市町村の数の比率に比較して，面積の比率が高くなっているのは，京浜葉の場合は東京・横浜，阪神の場合は大阪・神戸，そして中京の場合は名古屋など，比較的広大な面積をもった市をふくむために，2つの比率の上にかなりのズレがでたものである。

各年次ごとにみると，1930年にはかなり多くの市町村が都市化地域のなかにはいっており，1940年には全般にその比率は低く，終戦後の1950年には阪神をのぞくほかは最高の値をしめし，1950年になるとまた低下している。こうした市町村は3都市地域とも共通してその位置が各大都市に近いものから順次くみいれられていったが，時期によってその人口増加の性格をことにしていることに注意したい。

まず1920年当時人口密度 1000人/km² の都市は京浜葉地域では東京（ただし，現在の東京23区のうち，世田谷，練馬，杉並，葛飾，板橋，江戸川の各区は1000人/km² 以下で当時市街地の外縁にあった）横浜・横須賀のほかは，蕨・浦安しかなく，阪神地域では大阪・神戸のほかは尼崎・明石・布施・泉大津など工業都市として成長しはじめたものが主で，中京地区では岐阜市ははいらず名古屋・一宮のほかはこれに隣接した西枇杷島・新川や木曽川町がそれである。一般に江戸時代以前城下町等として発達した古い市街地を中心としたものか，明治末期から大正期にかけて近代工業都市としての目ばえを持ちはじめたものにかぎられている。

これが1930年になるとその数もふえ，とくに顕著なことは，工業都市として成長しはじめた諸都市がこのなかにはいっており，京浜葉地域で川崎・市川・武蔵野，阪神地域で，堺・八尾・守口・吹田・岸和田があらわれ，また，中京地域では岐阜のほか津島・尾西が加わっている。なお，工業の発展にともなう都市地域の発達で，その周辺の高級住宅地ないしは保養地としての性格をもった鎌倉・逗子や芦屋市がみえることにも特長がある。それが1940年になると，軍需工場の拡大強化と大都市内からの工場分散で，京浜葉地域で三鷹・川口・

浦和・与野が，阪神地域では，伊丹・西宮・貝塚などがみえはじめたことも着目せられ，同時に，平塚・小金井・保谷や寝屋川・枚岡や，蟹江・大垣など，衛星都市としての性格をもった市の名がみえることにもこの時代の特長がうかがえる。

終戦後の1950年になると，とくに京浜葉の場合，一般庶民の住宅地としての性格をもった市町が急速に1000人/km² の階級にはいり，1960年になるとより外側の住宅地化の影響で，たとえば京浜葉地域の相模原・大和・松戸・朝霞・羽村・日野・大和市が，阪神地域では枚方・泉佐野が，中京地域では稲沢・鳴海・上野などがみえていることにその特色がみとめられる。

6. むすび

以上は，京浜葉についておこなったと同じ方法で阪神・中京両地域の都市化の前線について吟味したもので，以下のごとく要約し得られる。

1) 日本の大都市周辺の都市化の前線をしめす指標として，市区町村別の人口密度1000人/km² の等値線，最近5年間人口増加率10%の等値線および都市人口率80%の線が適当なものと考えられ，人口増加形態ではII_aおよびIII_aの分布も新しい都市化の方向をしめす指標として有効である。

ただし，これ等の指標は主として大正期以後の新しい時期について適用せられるものであり，大正期以前の古い時期に対してどれだけの有効性をもつかは今後の検討に俟ちたい。

2) 都市化の前線の推進にあたって，戦前には工業地化によることが大きく戦後はとくに住宅地化が大きな意義をもっていることも指摘できる。

付　記

(1) 筆者は別に『日本の3大都市の通勤通学圏』と題して立正大学の『地域研究』に発表した。都市化の前線はその形が主として主要交通線にそう伸長形態をとっているこ

とは既述の通りで，京浜葉地域では，東方および東北方に短く，逆に中央本線および東海道本線ぞいに著しく伸び，阪神地域では大阪湾岸にそって西および南に著しくのび，中京地域では西北方に東海道本線にそって伸びている。ところが3大都市の通勤通学圏は3大都市とも，都心を中心としてほぼ円形に近い形をもっていることがあきらかとなった。これは鉄道・電車・バス・道路による通勤通学が時間的制約の上からほぼ同心円となるものと考えられる。そこで，3大都市ごとについて，都市化の前線と通勤通学圏の形を重ねあわせ，両者が重なった地域と重ならない地域を吟味検討することにより，各都市の今後の地域開発へ示唆を示えるものと考えられる。

（2） 京浜葉・阪神・中京の3地域の都市化地域は不規則な形をしているが，それぞれのしめる面積と同じ円の面積を考え，その半経を計算すると，京浜葉地域は52.3km，阪神地域は37.6km，中京地域は28.8kmとなる。

いま，これ等の値を縦軸にとり，横軸に各地域の中心都市の人口数（京浜葉では東京23区と横浜の人口の合計968.6万，阪神では大阪と神戸の人口の合計412.5万人，中京では名古屋と岐阜の人口の合計189.6万）を横軸にとり，両者の相関図を描くと，かなりきれいな直線的関係がみられ，それぞれの中心都市の人口数と，都市化地域の面積とのあいだに，正の相関のあることがみとめられた。この関係が偶然にでたものか，必然的な関係にあるものか，今後の課題とするが，一応の報告としたい。

参　照　文　献

（1） 岸本実(1964)：人口現象からみた京浜葉地域の都市化の限界　立正大学「文学部論叢」第19号　p.1～34.

（2） 例えば，木内・山鹿・清水・稲永（1964)：日本の都市化　古今書院

（3） 岸本実(1965)：日本の3大都市の都市化の前線と通勤通学圏　立正大学「地域研究」第6号.

（4） 位野木寿一(1964)：前掲(2)，p.99～110.

（5） 伊藤郷平(1964)：前掲(2)，p.88～99.